

第七章 生産諸要素の生産力を決める要因

一

生産が成り立つために必要な条件を整理する作業はここでひとまず終え、結論として、生産の要件は労働、資本、そして自然が与える原材料と動力の三つにまとめられる。このうち、労働と地球がもたらす原材料は基礎であり、欠かすことができない。自然がもたらす動力は労働を助けて生産を高める点で有用だが、必ずしも生産に不可欠ではない。残る要件である資本は、それ自体が過去の労働の産物であり、生産における働きも、実際には間接的な形の労働にほかならない。それでも資本を独立した要素として示しておく必要がある。作業中の消費に充てる資本を用意するには、仕事そのものに労働を投じるのと同様に、あらかじめ労働を投じて資本を生み出しておくことが不可欠だからである。資本の内訳を見ると、そのうち最大の部分は、労働者の生活を支えて労働の継続を可能にすることによってのみ間接的に生産に寄与し、残り、すなわち道具や材料は、自

然の働きや自然が供給する原材料と同じように、直接に生産に貢献する。

私たちはいま、政治経済学における第二の大きな問いである「これらの生産要素の生産力の程度は何によって左右されるのか」という問題に進む。というのも、同じ生産要素であっても、生産への効果は時代や地域によって大きく異なることが明らかだからだ。人口規模や領土の広さが同じでも、国によって生産量には大きな差が生じるほか、同じ国でも時期が変われば、ある時代の生産量が別の時代の生産量を上回ることがある。例えば、イングランドを、ロシアの中の同程度の領土と比べることも、ロシア人と同数の人口と比べることもできる。また、現在のイングランドを中世のイングランドと比べることもでき、現在のシチリア、北アフリカ、シリアを、ローマの征服以前にそれらが最も繁栄していた時代と比べることもできる。こうした生産力の差を生む要因には分かります。やすいものも分かりにくいものもあるため、以下では主要な要因をいくつか示す。

二一

生産性が高い最も分かりやすい理由は、土や気候などの自然条件に恵まれていること

3 第七章 生産諸要素の生産力を決める要因

にあり、なかでも土壌の肥沃さは重要である。アラビアの砂漠と、ガンジス川、ニジェール川、ミシシッピ川の沖積平野とでは条件が大きく異なるが、さらに重要なのは土よりも気候である。居住は可能でも寒すぎて農業に適さない国では、住民は遊牧生活を超えて定住生活に移れず、サーミの人びとがトナカイの飼育に頼ったり、イヌイットの人びとが狩猟や漁労で暮らしたりする。作物の育ち方も地域によって違い、スコットランド北部のようにオーツ麦は実っても小麦が育たない所がある一方、アイルランドの一部のように小麦は作れても湿気が多く日照が足りないため、収穫が少なく貴重品になる所もある。南へ行くほど、またヨーロッパの温帯では東へ行くほど、農業の選択肢は広がり、ぶどう、トウモロコシ、養蚕、いちじく、オリーブ、米、なつめやしが順に可能になり、やがて砂糖、コーヒー、綿花、香辛料なども有利になる。このような気候では、一般的な作物でも手入れが少なくてすみ、一年に二回、場合によっては三回収穫できる。気候の差が影響するのは農業だけではなく、屋外にさらされるものの耐久性にも及び、建築物のもちの良さにも表れる。カルナックやルクソールの神殿は、人為的な破壊がなければ、ほとんど永遠に当初の姿を保てたかもしれない。というのも、確かな歴史記録より前の碑文でさえ、この気候ではこちらの五〇年前の碑文より新しく見えることがあ

ると言われているからである。これに対してサンクトペテルブルクでは、旅行者の話として、花こう岩で造った大規模な建造物でも、夏の暑さと厳冬の霜が繰り返されるため、一世代ほど前のものがすでに再建を要するような状態になっているとされる。南欧の織物が色の豊かさと鮮やかさでイングランド製を上回るのも、霧が多く湿った気候の下では、化学者の知識や染色工の技術だけでは、大気の質の差を完全には埋められないからだと説明されている。

気候の影響の一つは、生産に携わる人々の身体的な必要量を減らすことにある。暑い地域では、住まいはそれほど堅固でなくても快適に暮らせ、衣服も最小限で足り、寒冷地で生存に欠かせない燃料も、工業用を除けば、ほとんど要らない。食料についても必要量が少なくてよいことは、後になって、食べ物摂取の多くは臓器を養うためだけではなく体温の維持や生命機能を保つための刺激を補うことにも向けられ、暑い気候ではその刺激の多くが空気と日光によってほぼ補われる、と理論が説明する以前から、経験的に確かめられてきた。こうして、ほかの地域では生活必需品の確保に充てられる労働の相当部分が不要となり、その分をより高度な目的や楽しみに回す余地が生まれる。ただしそれは、住民の気質が、その利点を人口の過度な増加や、安逸な休息へのふけりに

よって使い尽くしてしまわない場合に限られる。

自然の利点を考えるときは、土壌や気候だけでなく、利便な場所に鉱産物が豊富にある、適度な労力で採掘できることも挙げなければならない。英国の炭田はその代表で、厳しい気候という不利を住民にとって大きく補ってきた。さらに英国と米国は、地表のそれほど深くない場所に、精錬しやすい鉄鉱石を大量にもち、しかもそれを加工できる採掘可能な石炭層が近くにあるという点でも、ほとんど劣らない資源に恵まれている。山地や丘陵地では、豊かな天然水力が、一般に肥沃度の低い土壌という弱点をかなり補う。しかし、おそらくこれらすべてにも増す利点は海に面した立地であり、とりわけ良港という自然の港が伴う場合である。これに次ぐのが大河などの大きな可航河川である。結局のところ、こうした利点は輸送費を節約することに尽きるが、その経済的な優位の大きさは見落とされがちである。交換が生産をどのように押し上げ、いわゆる分業がどれほど効果をもつかを踏まえなければ、その価値を十分に見積もれないからである。輸送費の節約は、土地の不毛さを含むほとんどあらゆる自然上の不利を相殺してなお余ることがあり、とりわけ労働と科学が、自然に匹敵する人工の交通手段をまだ用意できていない産業の初期段階ほど、その効果が大きい。古代から中世にかけて繁栄したのは、

領土の広さや土壌の肥沃さで勝った共同体ではなく、土地のやせに迫られて海上交通の利を最大限に生かした共同体であり、アテネ、ティルス、マルセイユ、ヴェネツィア、バルト海沿岸の自由都市などが挙げられる。

二

自然条件の利点は、ほかの事情が同じであれば価値があまりに明白で、過小評価されることはまずない。けれども現実には、その利点が共同体にもたらす成果は、個人が財産や地位から得る効果と同じように、本来の性質や潜在力ほどには表れにくい。最良の気候と肥沃な土地を持つ国が、過去も現在もつねに最も豊かで最も強い国だったとは限らず、むしろ国民の大多数にとっては貧しい国に数えられることが多い。ただし、そのような貧しさの中でも、全体としては暮らしの満足が相対的に大きい面がある。そうした国では、わずかなもので生活が成り立つため、貧しい人々も将来の不安に苦しみにくく、ただ生きていること自体が心地よい気候では、彼らが好むぜいたくは休息で足りる。彼らには情熱に駆られたときの勢いは豊かにあるが、長いあいだ粘り強く働き続ける力

としては表れにくい。また、遠い将来の目的に関心を向けてよい政治制度を整えることも進みにくいため、勤労の成果が十分に保護されず、そのことが産業への動機をさらに弱める。生産の成否は環境よりも担い手の資質に左右され、身体と精神の力を養うのは、容易さではなく困難である。実際、他者の土地へ進出して征服し、相手に自分たちの利益のために働かせてきた集団の多くは、厳しい条件のもとで育ってきた。北方の森林地帯で鍛えられた例が多く、ギリシャ人やローマ人のように自然の厳しさが足りない場合でも、厳格な軍事規律という人工の厳しさがそれを補った。近代社会の状況のもとでその規律をやめられるようになると、南方はもはや征服国家を生まなくなり、軍事的活力だけでなく思索と産業の活力も、より条件に恵まれない北方へ主要な中心を移していった。

高い生産性を生む要因のうち第二は、労働に向けるエネルギー、つまり一時の踏ん張りではなく、日々の習慣として身についた規則的で持続的な力の大きさである。北米先住民ほど、突然の疲労や苦難にも不平を言わず、身体の力と、持ち合わせている心の能力とを長時間にわたって限界まで張りつめさせられる者は少ないが、目の前の必要の圧力からひとたび短い休息を得ると怠けることでも有名である。個人や国民は、強い目先

の動機があるときにどれほどの努力をでき、またしようとするかよりも、遠い目的のためにいま努力を重ねる力や、平常の仕事にどれほど徹底して取り組むかにおいて、より大きく違いが表れやすい。こうした資質がある程度備わっていることは、人類におけるいかなる大きな改善にとっても必要条件である。伝統的社会の人々を発展へ導くには、高尚でなくともよいから新しい欲求や願望を持たせ、それを満たすことが、安定して規則正しい身体的、精神的努力を引き出す動機となるよう促す必要がある。仮にジャマイカやデメララの黒人が解放後、予想されたとおり生活必需品だけで満足し、熱帯の気候や人口の少なさ、肥沃な土地の豊かさに支えられて、生存を支えるのに足りるわずかな労働以外はすべて放棄していたなら、奴隷時代より不幸は減っても、以前の奴隷状態よりいっそう野蛮な境遇へ沈んだはずだ。労働を促す動機として当時もっとも頼りにされたのは、立派な衣服や装身具を好む気持ちである。この嗜好が育てるに値すると擁護する者はいないし、多くの社会ではそれにふけることが富よりも貧困を招きがちだが、彼らの当時の心のありようでは、それが計画的な労働を自発的に引き受けさせ、勤労の習慣を身につけさせ、また保たせ、のちにより価値ある目的へ向け替えるための、ほとんど唯一の刺激だった可能性がある。イングランドで必要なのは富への欲求を教えること

ではなく、富の使い方を教え、富では買えない、または富を必要としない形で達成されるべき望ましいものの価値を理解させることである。人格が真に改善すれば、高い志を与える場合でも、いま欲しているものの価値をより正当に見積もらせるだけの場合でも、富の追求への熱中は必ず抑えられるだろうが、それでも優れた職工が示す、目の前の仕事への力強く実務的な取り組みまで弱める必要はない。それこそが彼らのもつとも貴重な資質だからである。

人類がこれまでうまく実現してこなかった望ましい中庸とは、働くときには力の限り、とりわけ知力を尽くして取り組む一方で、単なる金銭的利益のための労働に費やす時間は、一日の労働時間も一年の労働日数も一生涯の労働年数も、できる限り少なくするということである。

四

共同体の労働がどれほど成果を上げるかを決める第三の要素は、社会の中に蓄えられている技能と知識である。これらは、労働者自身の技能と知識であつてもよいし、労働

を指揮し管理する者のそれであつてもよい。反復的な作業では、手先の熟練が能率を高める。精神の働きが大きく関わる作業では、判断力や知性が成果と効率を押し上げる。

さらに、自然の力や物の性質に関する知識が産業の目的に生かされれば、生産は伸び、その効果はいつそう大きくなる。労働の生産性が生活技術に関する知識の水準と範囲によって制約されることは明らかであり、そうした技術が進歩し、自然の対象や力の産業的利用が改良されれば、同じ労働量と労働強度でも、より大きな産出を得られる。

これらの改良の主要な分野の一つは、道具や機械の発明とその活用にある。機械が生産を増やし、労働を節約する仕組みをここで特に細部まで述べる必要はないが、学術的でありながら平易な説明と具体例は、バベッジの著名な『機械と製造の経済学』に示されている。同書には、機械が人の力では及ばないほど大きな力を發揮し、人の手では扱えないほど繊細な作業を行うことの有効性を例で示した章がある。しかし、機械の助けがなければそもそも全くだきない仕事の例は、わざわざそこまで探さなくても身近に見つかる。たとえば、蒸気機関などで動くポンプがなければ、鉱山にたまる水は多くの場合まったく排出できず、少し深く掘っただけで鉱山は放棄せざるを得ない。船や舟がなければ海を渡れず、何らかの道具がなければ木を伐り倒すことも岩を掘り進めることも

できない。土地を耕すには、鋤、少なくとも鍬が必要である。それでも、人類がこれまで行ってきた仕事の多くは、単純で粗末な器具があれば文字どおり実行できた。ところが、その後の発明は、仕事をより完全に、より精密に行うこと、そしてとりわけ必要な労働量を大きく減らすことに主眼が置かれ、そのようにして節約された労働力は別の仕事へ振り向けられていった。

機械の導入は、知識が生産を支える方法の一つにすぎず、知識が生産に役立つ場面はそれだけに限られない。農業や園芸では、鋤の発明とその継続的な改良や、ほかのいくつかの簡単な器具を除けば、機械が重要な役割を果たしうることが、一八五二年の時点ですぐ示され始めた程度だった。農業における最大の発明は、土地そのものと、そこに育つ植物に、より適切な方法を直接適用することであり、輪作によって二、三年に一度一季節土地を休ませる必要を減らし、改良した肥料で作付けによって失われた地力を回復させ、表土だけでなく下層土まで耕して排水も進め、泥炭地や湿地を耕地に転換し、経験にもとづいて剪定や誘引、支柱の工夫を見直し、費用のかかる作物では疎植にして、その根や種を置く土をより細かく砕いて整地するなど、さまざまな改善が進んだ。製造業と商業では、時間を節約し、投じた労働や費用に対する回収をより早める改良が

重要であり、材料の節約に利点がある改良も重視された。

五

共同体の知識が増すと富も増えることは、鉄道や蒸気船のような目立つ例によって、教育をあまり受けていない人々にまで広く知られているので、あらためて詳しく説明する必要はない。むしろ、国民全体に知性が広く行き渡ること自体の経済的価値は、まだ十分に理解され認められていない。産業の現場では、事業を指揮し監督できる人材や、ほとんど暗記や型どおりの作業に還元できない工程を担える人材の数が、需要に比べていつも大きく不足している。そのことは、そうした人々に支払われる給与と通常の労働賃金とのあいだに、莫大な差があることから明らかである。労働者階級の多数に見られる実地の良識の欠乏は、計算下手となつて現れ、たとえば家計運営を無計画で締めきなく、不規則で不安定にしがちである。こうした傾向は、彼らを低い水準の知的労働以外には不適格にし、同じ活力があつても産業の生産性を本来よりはるかに低くしてしまう。この限られた意味においてさえ、民衆教育は政治家が重視すべき課題であり、とり

わけイングランドでは見過ごせない。諸国の労働者を雇い慣れた有能な観察者は、他国の職工には、教育とは別に優れた知性がしばしば見られる一方で、イングランドの労働者が単なる木こりや水くみ以上の働きをするなら、そのおかげは教育にあり、しかもその教育はほとんどの場合、自学自習だと証言している。チューリヒの技師で綿工業の経営者でもあるエッシャー氏は、国籍の異なる職工をほぼ二、〇〇〇人雇っていたが、一八四〇年の救貧法委員会報告書に付された救貧児童の訓練に関する証言の中で、イングランドの職工と大陸の職工を対比して評価を述べており、同様の経験を持つ人々ならこの評価を確認するだろうとされている。

イタリア人は、新しい作業の指示や労働内容の説明をすぐに理解し、雇い主の意図を素早くつかみ、状況の変化にもほかの集団より柔軟に順応しやすいとされる。フランスの職工にも同じような傾向はあるが、その程度はやや弱いという。これに対して、イングランド、スイス、ドイツ、オランダの職工は、理解に時間がかかり、全体として把握が遅いと見られている。ただし、職工としての適性や評価に限れば、専門分野ごとに集中的な訓練を受け、比較的高度な教育や訓練を積んできたイングランド人が優位だとされる。一方、事業の担い手として幅広く力を発揮し、雇い主が身近に置いて働かせたい

人材としては、ザクセン人とスイス人が望ましく、とりわけザクセン人が適しているとされる。一般教育が行き届いていて能力が特定の職務に縛られにくく、短い準備で求められた別の仕事にも移れるためだという。たとえばイングランド人の職工が蒸気機関の据え付けや組み立てに従事していれば、その作業は理解してこなすものの、それ以外の事態や、たとえ密接に関連する機械分野であっても、事情の変化に合わせた手配や助言、状況に応じた段取り、明瞭で分かりやすい報告書や説明文、書簡の作成といった点では比較的手が回りにくく、対応が遅れやすいとされる。

労働者階級における精神の教養と道徳的信頼性の結びつきについて、同じ証言者は次のように述べている。教育を受けた職工は概してあらゆる点で優れた道徳的習慣をもち、第一に酒に溺れることがなく、娯楽も分別と節度をもってより理性的で洗練されたものを選ぶという。交友関係でもより良い相手や場を好み、敬意をもってそこに近づくため受け入れられやすく、音楽を楽しみ、読書をし、景色の楽しみを味わい、仲間を集めて田舎へ小旅行や遠足にも出かける。儉約にも努め、その姿勢は自分の財布だけでなく雇い主の資本の扱いにも及ぶので、結果として正直で任せても安心できるとされる。これに対して英国の職工は、特殊な訓練を受けた仕事の技能という点ではもつとも巧みであ

る一方、素行の面では、われわれが雇ったどの国の職工よりも乱れて放埒で手に負えず、もつとも敬意を得にくく信頼もしにくいと述べられている。この点は大陸の製造業者の経験として広く共有され、とくに英国の製造業者がもつとも強く不満を訴えるという。ただし、この性向は教育を受けた英国の職工には当てはまらず、教育を欠く者ほど、また欠け方が大きいほど強く表れるとも付け加えられている。さらに、英国で雇い主の鉄の規律に抑えられていた教育のない職工が、大陸で教育のある職工が雇い主から当然のものとして受ける礼節と友好、親しみをもつて遇されると、英国の職工はすっかり均衡を失い、自分の立場を理解できないまま、やがて手に負えず役に立たなくなることがあるとも指摘される。この観察結果は英国国内での経験からも裏づけられ、教育のない英国の労働者は平等の観念が少しでも入り込むと舞い上がり、卑屈さや服従が薄れると、今度は横柄で傲慢になりやすいという。

労働者の道徳的な資質は、知的能力と同じくらい、仕事の能率と価値を左右する。過度の飲酒が心身の働きを損ね、気まぐれで落ち着きのない習慣が仕事の勢いと継続性を弱めることは明らかなので、ここで強調するまでもない。より深く考えるべきなのは、労働の総成果がどれほど働き手の信頼性に支えられているかという点である。契約とお

りに働いているかを見張り、履行を確かめるために費やされる労力は、生産の現場から差し引かれて、不正直が生んだ付随業務に回される。しかも、雇われ労働者では今やほとんど常にそうだが、監視が少しでも緩めば、それは契約の履行を逃れる好機として熱心に利用され、どれほどの外的な予防策も十分には効きにくい。互いを信頼できる利点は人間の暮らしの隅々に及び、経済面はおそらくその一部にすぎないが、それでも計り知れない。社会に富の浪費をもたらす不誠実さのうち、最も分かりやすい部分だけを見ても、あらゆる豊かな共同体には、略奪やだましで生計を立てる層が存在する。その人数は正確に把握しにくいが、イングランドのような国では、控えめに見積もっても非常に多い。彼らを養う負担は国の産業に直接の重荷となる。さらに、警察や刑罰の仕組み、刑事司法、そして一部の民事司法が必要となるが、これらは前者によって生じる第二の重荷である。法律の欠陥そのものによらない限り、高額報酬を得る法律家という職業も、主として人間の不正直さによって必要とされ、支えられている。誠実さの水準が上がれば、こうした費用は減る。しかし、この直接的な節約は、働き手が引き受けたことを誠実に果たすなら得られる、あらゆる労働の産出の莫大な増加と、時間や費用の大きな節約によって、はるかに上回られるだろう。そして、協力が必要な相手が皆、契約ど

おりに自分の役割を忠実に果たすと信じられるなら、さまざまな仕事は意欲と力強さ、自信をもって計画され、遂行される。共同の行動は、人間が互いを頼れる度合いに応じてこそ可能になる。ヨーロッパには、産業の潜在力は一流でも、多額の資金の受け取りと支払いを任せられる人物がまれであることが、大規模事業を営むうえでの最も深刻な障害となっている国がある。また、見本どおりの品質が得られると当てにできないために、商人がその国の商品の取引をためらう国もある。こうした短絡的な詐欺は、イングランドの輸出にも決して珍しくない。「悪魔の粉塵」は誰かが耳にしたことがあり、さらにバベッジ氏が挙げた例の中には、偽造と詐欺によって輸取出引の一分野が長く実際に途絶えたものもある。一方で、実証された信用が取引にもたらす確かな利益も、同じ著作で同様に印象的に示されている。国内有数の都市では、事業の過程で日々行われる大規模な売買においても、当事者が書面を交わさないという。一年の取引にわたって考えれば、時間や手間、費用の節約として、その都市の生産者と商人にどれほど大きな利得がもたらされることか。また、先の戦争で大陸が英国製品を締め出し、ベルリン勅令とミラノ勅令に違反すれば重罰が科された時期に、英国のある大工場は、ドイツ中部の商社との大口取引を続けていたが、署名のない、あるいは一人の洗礼名だけしか記され

ない手紙で、発送方法や支払時期と方法を指定した注文が届き続けたという。これらの注文は実行され、支払いに不正は一度もなかったという。

六

生産要素の生産力を左右する二次的要因のうち、最も重要なのは「安全」である。ここでいう安全とは、社会が構成員にどれほど十分な保護を与えているかを指し、政府による保護と、政府からの保護とから成るが、より重要なのは後者である。価値ある財産を持つっていると知られている者が、強欲な政府の役人に暴力的にそれを奪われるほかにいと予想される社会では、多くの人が生活必需品を超えて生産しようと力を尽くすとは考えにくい。かつて繁栄し人口も多かったのに、いまは貧しいままのアジアの肥沃な地域が少なくないことは、この事情で説明されてきた。しかし、そこから欧州でも最も統治が行き届いた地域で享受される安全の水準に至るまでには、なお多くの段階がある。フランスでは革命前、土地への不適切な課税制度に加え、課税を口実にした恣意的な取り立てに救済の道がほとんどなかったことが深刻であったため、耕作者は貧しく見える

ことが得策だと感じ、その結果、耕作は粗放になった。生産者の活力を完全に麻痺させる不安全とは、政府、または政府の権限を与えられた者から生じる不安全である。ほかの略奪者に対しては、自ら身を守る見込みがまだ残る。古代ギリシャとその植民市、中世のフランドルとイタリアは、現代の感覚でいう安全を享受していたとはいいがたく、社会は不安定で騒然としており、身体と財産は一、〇〇〇の危険にさらされていた。だが、自由な国であったため、政府に恣意的に抑圧されたり、組織的に収奪されたりすることは概してなかったし、ほかの敵に対しては制度が引き出した個々の活力によって抵抗できたため、労働はきわめて生産的となり、自由である限り富は増え続けた。ローマの専制は帝国内の戦争と内紛を終わらせ、住民を従来の不安全の多くから解放した一方で、自らの強欲による過酷な支配を残したため、人びとは活力を失って貧しくなり、ついには野蛮だが自由な侵入者の格好の獲物となった。人びとが戦おうとも働こうともしなかったのは、その見返りをもはや享受できなかったからである。

近代国家で人身や財産の安全が保たれているのは、法律の力だけでなく、社会の慣習や世論が大きく働いているからである。欧州にはつい最近まで、君主が名目上は絶対の権力を持つとされる国もあったが、確立した慣例が歯止めとなり、政府によって財産を

恣意的に没収されたり特別の負担を課されたりする危険を、臣民が現実にはほとんど感じない場合もあった。ただし、そのような政府では、絶対政体に共通して情報公開が乏しいため、下級官吏による小さな略奪やさまざまな圧政が相当程度起きてても、救済が得られにくい。英国では、政府の役人から受ける害については制度と慣習の両面で一定の保護があるが、ほかの悪意ある者から身を守ることにについては、制度に負うところがきわめて小さい。財産を守るための費用が過大で、被害に甘んじたほうが結局は得だという計算になるのであれば、法律が十分な保護を与えているとはいえない。英国で財産が比較的安全なのは、公然たる暴力を除けば、法律や裁判所が直接に働くことよりも、世論と発覚への恐れが強く作用しているためである。

社会が財産として認めるものを守るために社会が意図的に設けている保護策に不備があるかどうかとは別に、制度の欠陥によって、一国の生産資源が最も有利な形で活用されることを妨げる要因は、ほかにもいくつもある。そうした点の多くは、今後の議論の中で触れる。ここで言うておけば十分なのは、産業の効率は、産業の果実がそれを担った人に確実に帰属するほど高まると考えられること、そして社会の制度は、各人の労働への報いが、その労働の生む利益にできる限り見合うように整えられるほど、有益な努

力を促すという点である。特定の階層や一部の人を他者の不利益の上に優遇する法律や慣行、共同体の一部が自らの利益を求めて努力することを縛る仕組み、そうした努力とその自然な果実との間に障壁を置く仕組みは、ほかの理由がどうであれ、経済政策の基本原則に反し、社会全体の総生産力を本来より低い水準にとどめる。